名古屋大学教育学部附属中高校
中等教育研究協議会
中学校シンポジウム「移行期の総合学習の課題」

「総合的学習初年度の取り組みから」

愛知県安城市立安城西中学校　柴田富子氏

クローズアップ現代　６月に放映された。
NHK が期待したもの　うまくいっていないところ、困っているところを撮ろうとした。
教員は36人。教科で進める、行事で進めるかを考えた。子供の力を育てる。担任が行うことにした。本はできあがったもの。いい学校の取り組みは見ないでおこうとした。
私たちにしかできないものを試行錯誤してやっていこうとした。
始めたのが４月。とにかく子供を見る。教科書も指導書もない。
課題はどうやるか、教師の４月
例　教師が環境に対しどれくらいの重いがあるかを語り合った。それについてどう感じるか、経験がない。そんなところから、教師がまず勉強しようとした。私たちが勉強を始めた。本を買い、新聞を読んだ。日曜日に色んなところに出かけて、VTR をとってきた。
最初は「テーマユニット」ということで、環境についてが取り組みやすいのではないかということで取り上げた。安城市やはぎ川の上流にキャンプ地があり、１年生がそこにキャンプに行く。
１年生：流域社会　山から海まで
２年生：身近なゴミ問題
３年生：地球規模の環境問題
あとは、担任に任せた。
５月の連休には教師は色んな準備をした。
そして、最初の授業が行われた。課題を設定させるための授業を持った。それでも課題が決められない生徒がいた。やっと子どもが課題を持ち始めるまで、１ヶ月かかった。５月中旬。
実際に子どもたちに菊と「ダイオキシンについて」「温暖化について」等の言葉が返ってきた。今までに40回近くの協議会をもった。
課題設定には、問いかけが大切。、どうして？なんで？もう一度など。もう一度生徒に返すようにした。どの授業についてもいえる変革ではないか。
子供たちが少しずつ変わっていった。
子供の奥にある心を引き出す。
子供が職員室にやってくる。アポを取って聞きたいことをいっぱい聞いてくる。教師は思いきって「行ってらっしゃい」と外へ出す。
聞いてくると、発表したくなる。中間発表を持った。知識ばっかり知ってきて、自分の考えが入ってないことに気がついた。それでいいの？調べ方を考えたらいいのか？自分の考え方を持つことが総合学習の中では大切ということを確認した。
話がだんだん進んでいく。
上手にまとめる子がいる。楽しい実践をする子がいる。それぞれのよさ、その子なりの良さだから、とにかく認めていこうとした。
強い動機があれば、進めていけることが９月に確認できた。
例：教師が放置自転車のことを話しても、放置自転車に注目したのはたった一人の生徒だけだった。「この放置自転車はどうなってしまうのか考えたら、夜も眠れなかった」と言った。
（15分で時間切れの司会者の合図）

「総合的な学習と統合カリキュラム」

信州大学教育学部附属長野中学校　徳武隆夫氏

（ＰＣを使っての発表だが、画面が大きすぎてスクリーンからはみ出し非常に読みにくい発表となった）
学校規模　１学年６学級
生きる力をはぐくむ教育過程
１年【いのち】成長する私の心と体（前期）いのち（後期）
２年【夢に生きる－ DISCOVERER －】（前期）ヒロシマに学ぶ（後期）
３年【21世紀に生きる】私の未来予想図（前期）学級自由題材（後期）
２年生の取り組み例：
14歳の問い：人生を通して学ぶとは
　夢を追い続けている社会人とのであい
　「目標を持っている人は輝きが違った」
　仕事を任されていることの意味
　働くこと＝学ぶこと、これが社会体験－－
　人生を通して学び続けることを大切にしたいと言った。
ポートフォリオを活用した評価
ワークシートを活用した面接法
生徒の真の学びとの出会い→指導観や教育過程観の転換→改善・修正

「総合学習の発展と新たな課題」

名古屋大学教育学部附属中・高校　丸山豊氏

誰がやるのか？という基本的なところでもめる。校長はやらなくてよい、後はみんなでやる。

というところからスタートした。
養護教諭を含め、全部一丸となってやれ
1. 教職員の意識をどう高めるか
2. 机上の学習のにならないように。思い切って外へ出しましょうといっている。校長はいやがる。学校の開放か
3. テーマ制　21世紀の課題　平和　環境　生命など
小学校の総合学習とどこが違うのかを出そうとした。評価観点をどうするか非常にもめる。生きる力はなかなか推し量れない
有る程度基本的に打ち出せたと思う。

＊５年間に我々が生徒から学んだものは何か。
教師が生徒から学ぶ。生徒と同じ土俵でやっていく。生徒は教師に自慢できることがままある。
高校入試のプレッシャーをなくすといいものができる。
自分の人生を選択することにつながっていく。それがないとただの徘徊主義、――になっていく。
今の生徒はグループ学習を嫌う。１人でやった方がよほど気楽という。グループでやると人間関係がぎくしゃくする。
なかなか生活指導に結びつかない。長期的に人家右傾制をねらっていかないといけない。
何かとお茶を濁せばいいという時代ではない。
本質的に生徒は課題を持っているということを教師は知らないといけない。

＊今、なぜ総合なのか。
５年間やってくると、マンネリ化になる。マニュアルがほしくなる。昨年通りの実践が繰り返される。それに安住してしまう。常に生み出していかないといけないという教師のエネルギーが問われる。
総合とは何かを常に問われなければいけない。自分の生き方とどうかかわるかという視点から捉えないといけない。

総合学習をやった教師が自分の教科にどうかえっていくか。
新しい教科　子供の興味関心は枠を越える。教科の学習力をもっともっとつっこんでいかないといけないと思っている。教科の再編成だと思う。その後の学習指導要領はそのあたりかと思っている。
今までは自分の教科ができてほしい。これからは違う。
子供自身を総合的に捉えていく教師の――
学校そのものが地域と通じて評価させる。

３人の提言を受けて：
コーディネーター的場正美氏
（名古屋大学教育学部教授）

最後には、どういう学校を目指しているのか　学校づくりを聞きたい。
やっている途中は自分たちの課題が分からない。テーマを選ぶときに果たして生徒たちに自由に選ばせてよいのかという迷い。
総合学習のテーマをどうやって、子供たちの中に発展させていくのか？

柴田：テーマは子供たちが選んできたものを大切にしている。テーマユニットでは、教師の出したものをヒントにしている。フリーユニットは生徒が自由に選んでいる。

丸山：はじめに子供有り気かどうか。これは小学校でよいと思う。忠、興味関心だけに終わってしまってはいけない。現代的な課題。答えが一つにならないところがよいところ。中高ではテーマ性は必要だと思う。

徳武：学年ごとにもっている。小学校時代の総合的な学習経験が深まってくれば、また考えないといけない。本校では、環境、情報、国際理解などは、合科型のカリキュラムの方が有効と考えている。

的場：テーマの組立がかなり違っている。自由に選んだとき、これはうまくいかないのでは？ということは？問いかけの中身を

柴田：視点を変換させるための問いかけ。何を調べたいと言っているのかを話し合う。アドバイスして引き出していく。

的場：学校の先生が変わったと言われるが、変わっていない先生はいるのか？数学の先生はのりにくいといわれるがどうか？

徳武：多くの先生はこの2，3年で変わった。学年会議が月２回あり、その一回は総合的な学習をどうするのかを話し合っている。学年間のつながりができた。評価を生徒の追求に生かすとはどういうことかが少しずつ見えてきた。学力評価、学習評価、評価の違いが見えてきた。教師のガイダンス機能を生かすことが大切。カウンセリング的アプローチがないと（？）生徒がどこで行き詰まるのか読めなくなる。プロセス評価　実際にはやりにくい。